

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

日本占領期のマラヤにおけるラマダンとハリラヤ・プアサ

黒崎友美



シンガポールにある日本占領期に関するモニュメント（2019年2月、筆者撮影）

つい先日、マレーシアはラマダン（断食月）を迎えた。約3週間後にはハリラヤ・プアサ（断食明け大祭）を迎える。ムスリム（イスラム教徒）が毎年迎える重要な宗教行事は、1942年2月に始まった約3年半に及ぶ日本占領期にはどのように祝われたのだろうか。

日本軍は42年2月15日にシンガポールを陥落させた後、マラヤに軍政を敷いた。同年3月の時点で宗教を担当する人物が軍政部にすでに配置されており、日本軍にとって宗教の扱いは当初から大きな関心事であったようだ。

軍政当局が同年4月に発出した文書には、宗教を保護し、信仰に基づく風習は努めて尊重し、民心の安定を図るとあり、軍政当局が宗教を軽視することなく、重要な事柄と位置付けていたことがうかがえる。宗教に関する事柄を扱う部署である文教科が発出した文書にも、宗教への絶対不干渉を根本的な方針にすることが明示されていた。

その一方で、いずれの文書にも、宗教を通じて日本軍による統治にムスリムを協力させようとする意図が示されていた。

軍政当局は、ムスリムの信仰心のあつさに強く印象付けられていたようである。軍政当局が発出した文書には、ムスリムの信仰心について、「敬虔（けいけん）」や「熱烈」といった表現が用いられている。

日本軍政下のマラヤで、ムスリムが最初にラマダンを迎えたのは42年9月のことであった。軍政当局はマラヤ各地に配置した日本人地方首長に対し、ムスリムの旧来の慣習を尊重するよう注意を促しており、ムスリムの信仰や慣習を尊重する姿勢を持つことが意識さ

れていた。ラマダンに際する断食の開始も新聞で報じられた。

しかしその一方で、ラマダンに際して執り行われる礼拝で日本軍の戦勝祈願がささげられたとする新聞報道もあった。軍政当局はムスリムの信仰に介入するとともに、報道を通じてマラヤのムスリムが日本軍に協力的であるとする宣伝を行っていた。

軍政当局の同様の対応は、ハリラヤ・プアサにも顕著に表れていた。シンガポールで発行された新聞では、42年のハリラヤ・プアサに、礼拝で日本の勝利のために祈りがささげられたと報道された。43年には、イスラム指導者が戦争での日本の成功を祈り、ムスリムの家庭では犠牲となった日本軍兵士の霊魂のために祈りがささげられたと報道された。

ハリラヤ・プアサに際してはムスリムが参加する集いが催されていた。42年にペナン州で開かれた集いのプログラムには、集団礼拝が含まれていた一方で、イスラム教とは無関係の事項も含まれていた。

ペナン州長官による演説が行われたが、それは日本軍の宣伝的な要素を多く含み、ハリラヤ・プアサを祝うに即する内容とはいえないものであった。また皇居の方角を向いて敬礼を行う宮城遥拝（きゅうじょうようはい）が行われたり、集いの締めくりに万歳三唱が行われたりした。

こうしたプログラムには、軍政当局が宗教行事を日本軍の宣伝に利用していたことが顕著に示されている。またムスリムにとってこうした行事は、自身が日本軍政下にあることを強く意識する機会となっていたといえる。

本稿で取り上げた事例はほんの一例に過ぎない。しかしラマダンとハリラヤ・プアサという現在の日常の一場面と照らし合わせることで、日本占領期を生きたマラヤのムスリムの日常について少しでもイメージを提供できれば幸いである。

< 筆者紹介 >

1998年生まれ。東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士前期課程修了。修士（学術）。専門は東南アジア近現代史、特にマレーシア・シンガポールの近現代史。主要論文に「日本占領期のマレー半島におけるムスリムの宗教行事」（『東京外大 東南アジア学』第27号、2022年）がある。